

## 第34回群馬放射線腫瘍研究会抄録

日 時：平成 18 年 1 月 21 日 (土), 午後 1 時~6 時 00 分  
場 所：群馬大学医学部 臨床大講堂  
大会長：松原 國夫 (群馬大医・附・放射線部)

### 一般演題 (症例報告)

座長 樋口 啓子 (群馬県立がんセンター)

#### 1. 全身性転移を認めた神経膠芽腫の一例

原田 耕作, 鈴木 義行, 塩谷真里子  
桜井 英幸, 中野 隆史

(群馬大院・医・腫瘍放射線学)

【はじめに】 神経膠芽腫の中枢神経外転移は非常に稀であり, 1%以下と報告されている。我々は神経膠芽腫で全身性転移を認めた 1 例を経験したので報告する。【症例】 40 歳, 男性。2005 年 6 月に頭痛で近医を受診し, MRI にて左側頭葉から頭蓋外へ及ぶ脳腫瘍が認められた。他院にて腫瘍摘出術が行われ, 病理診断は glioblastoma multiforme であった。さらに, 術後放射線治療および化学療法が施行され, 9 月退院した。同月に腰痛が出現したため近医を受診したところ, MRI で脊椎に多発性腫瘍性病変が認められたため, 当院に精査・加療目的で紹介された。CT ガイド下生検にて GFAP 陽性の腫瘍が認められ, 病理診断にて神経膠芽腫の骨転移と診断された。さらに, PET 及び CT にて, 脳局所再発, 肝転移, 肺転移が認められた。治療としては, 2005 年 10 月に腰椎転移に対し外照射 30Gy/10fr/15days 施行したが, 腫瘍は増大し疼痛も増悪しており, 現在, 緩和的治療が行われている。神経膠芽腫の中枢神経外転移に対する放射線治療の効果は極めて不良であった。

#### 2. 化学放射線療法を施行した高齢食道癌の 1 例

塩谷真里子, 桜井 英幸, 野中 哲生  
鈴木 義行, 原田 耕作, 中野 隆史

(群馬大院・医・腫瘍放射線学)

症例は 80 歳男性。胸部下部食道癌 cT3N1 (噴門部) M1b (肺) stage IV B の診断で, 放射線治療目的に当科紹介となった。PS 良好のため, 化学療法の同時併用を行った。放射線治療は 10MVX 線, 前後対向 2 門, 2Gy/Fr で開始し, 30Gy 時点にて 1 週間の休止をおいた後, 40Gy 以降は斜入対向 2 門で総線量 60Gy/30Fr まで施行した。

化学療法として, nedaplatin (day1), 5-FU (day1-5) を放射線治療開始第 1 週目, split 後の再開時に計 2 コース行った。治療後の食道透視では, 粘膜不整は改善してきており, CT 上も腹部リンパ節は縮小していた。有害事象として, Grade3 の白血球減少が認められたが, G-CSF 製剤の使用で改善が認められた。他に Grade2 の放射線食道炎, Grade1 の皮膚炎が認められた。高齢であったが, 有害事象は許容範囲内で治療を完遂し得たので報告する。

#### 3. 放射線治療が奏功した胸腺カルチノイドの一例

吉田 大作, 玉木 義雄, 樋口 啓子  
北本 佳住

(群馬県立がんセンター 放射線科)

症例は 64 歳男性。2002 年 8 月より熱感, 全身倦怠感を自覚。近医での胸部単純写真, CT 上前縦隔に腫瘤を指摘された。同年 11 月当院受診し, 開胸行ったが大動脈浸潤のため手術不能とされ生検のみとなった。非定型カルチノイドと診断, 化学療法 2 コース施行し治療効果は NC。引き続き前縦隔に対し放射線治療を 60Gy/30fr 施行し, PR が得られた。治療終了 4 ヶ月後に肝転移出現。RFA を 1 回, TAE を 2 回施行したが, 4 ヶ月後の CT にて肝及び肺に新たな病変が出現した。肝に対し放射線治療を 60Gy/30fr 施行し, 病変の制御認めている。肺病変に対しては, 定位放射線治療を予定されている。治療開始から 3 年経過し生存中で, 治療部位は制御されている。放射線治療が奏功している胸腺カルチノイドを 1 例経験したので報告する。